# そうだったのか「倭の五王」

大越邦生

発表者は、現在、初心者を対象とした歴史講座で、古田の古代史を可視化し、市民に広げる活動をしている。

古代史セミナーでは、その延長上で、４～６世紀（時間の関係から主に５世紀となった）の倭王に焦点を当て、いくつかのトピックから全体を俯瞰したい。

発表の趣旨は、古田の古代史の「見える化」であって「研究発表」ではない。参加者にとっては周知の内容ばかりで退屈かもしれないが、対象が初心者ということからご容赦いただきたい。発表者としては、プレゼンが多くの方に話題を提供し、会場での議論の活性化につながればよいと願っている。

古田の著書からとりあげたテーマは以下の通りである。

**１　「倭の五王」とは**

「倭の五王」について概説する。五王が登場する中国史書と、現在までの主流をなす「倭の五王＝近畿天皇」説について触れる。

**２　根本の問題　人名と系譜の比定**

『宋書』等の倭の五王と、『記紀』の天皇名及び系譜は一致しない。この根本の矛盾について、「現在に至るまで定説の原型として大きな影響を持ち続けている」松下見林の説を中心に解説する。見林や後代の論者の解釈には一貫性がなく、古田は『宋書』等の「倭の五王」は、『記紀』の「応神～雄略天皇」に比定できないとする。さらに、高句麗王や百済王が「中国風一字名称」を名のっていることから、同じ東夷の倭王名も「中国風一字名称」であったと結論づける。

①先駆者　松下見林の人名比定

②応神～雄略との系譜の比定

③系譜の矛盾

④さらに将軍号も

⑤倭王は中国風一字名称を名のった（古田の調査）

**３　古田武彦の「倭の五王」研究**

古田武彦の文献研究の基礎には、一貫した方法論がある。その方法を用い、古田は古代史上の輝かしい成果をあげてきた。ここでは、そのひとつ、中国側の史料と日本側の史料、それら文献の見方について解説する。本章からが、実質「古田の倭の五王」研究である。

・古田の文献研究の指針

**４　武の上表文が示す倭王の拠点**

古田は、「武の上表文・近畿中心説」を批判し、上表文において夷蛮の王（天子の臣）を基準にした夷蛮表記はあり得ないとする。また、中国側の用字法では、倭国は東夷であり、さらに辺遠の地は毛である。その解釈から、上表文は倭王が中国側の視点に立ち、自らの拠点を夷蛮表記していると結論づける。ここでは上表文の分析から、「倭王の拠点は九州にあ

った」という結論に至るまでの、古田の論証過程について解説する。

プレゼン②に、「衆夷（倭王の拠点）の範囲予想図」画像を挿入した。画像は、古田のアイデアにもとづき、㋐半島で平定した 99 国が、武の主張する 6 国になった、㋑１国の領土面積は一定、という前提に立って製作した。

①通説の夷蛮表記理解

②天子から見た倭国の地理

③夷蛮国の（上表文での）方位記述例

④上表文の衆夷・毛人・海北

⑤武が主張する支配領域

**５　さらに、倭国の中心王朝を探究**

古田は言う。「倭の五王は、記紀の応神～雄略天皇に比定できない。それなら、倭の五王とはどこの王朝の王者か。その問いへの解答は、必ずしも容易ではない。なぜなら、宋書倭国伝の場合、三国志や隋書の場合と異なり、倭国への行路記事がない。倭国の中心国名や諸国名もない。“宋書倭国伝のみから”は、倭国の都の位置は特定しにくい。この史料性格上の事実から我々は出発しなければならない。だが、それでも手がかりはある」と。

ここでは、古田が言う「手がかり」４点について解説する。

①武の上表文が語る倭国の拠点

②『南斉書』が示す倭国の拠点

③筑紫に残る大将軍の本営名

④筑紫に残る南宋の官署名

◎４章・５章のまとめ

**６　安東将軍と平西将軍**

古田の「倭の五王＝九州王朝説」を批判した論文、『平西将軍、倭隋の解釈』（武田幸男）がある。倭王珍が九州なら「平西将軍」の倭隋は海に位置する、というものだ。対して、古田は宋書全体から「平西将軍」の事例をぬき出し、都（建康）内や、都の西北の隣接した地の将軍にも「平西将軍」の称号が与えられている事実に着目する。そして、“太宰府が都、前原に平西将軍という構図もあり得る”と反論する。それら一連の流れについて解説する。

①「倭の五王＝九州王朝」説への批判

②古田が答える「平西将軍」の拠点

**７　珍・興・武の即位年次**

古田の「倭の五王の年次」は、通説や一般書籍（例えば岩波文庫）と異なる点がある。はじめて古田の古代史を学ぶ人のためにその点を解説する。また、次頁には参考資料を添付した。

①即位記事　珍・興・武

②「讃死し珍立つ」年次は 425 年項

③「済の死・興の貢献」年次は 462 年項

④「興死し武立つ」年次は478年項

⑤帝紀が示す「興死し武立つ」の年次

【参考】古田が③④の記述様式例とする、『宋書』（氐胡伝、大且梁伝）の一部

| |
|---|
| 『宋書』氐胡伝、大且梁伝<br>㋐（元嘉）十年（四三二）四月、蒙遜卒す。時に年六十六。私に諡（おくりな）して武宣王という。（略）茂虔（もけん）をして主と為す。蒙遜の位号をおそう。<br>㋑十一年（四三三）茂虔上表していわく「臣聞く、・・先臣蒙遜・・謹んで諡の法を案ずるに、『禍乱を剋定（こくてい）する』を武といい、『善く聞き、周達せしむる』を宣という。すなわち、諡をたてまつって、武宣王となす。（略）」<br>㋒詔していわく「すなわち使を遣わして弔祭せしめ、ならびに顕諡（けんし）を加う。（略）」 |

《古田の解説》

㋐「蒙遜が死に、代わって自分（茂虔）が王位を継いだ」

（解説）次の文書を資料根拠とする地の文（沈約の書いた前置き・解説文）

㋑その文書（上表文）・・自分（茂虔）を「臣」、蒙遜を「先臣」と呼んでいる。

（解説）当の上表文冒頭に㋐が書かれていたと考えられる。

㋒それを公認した詔

＊

時間の関係から取り上げられなかった「そうだったのか『倭の五王』第Ⅱ部」のテーマと概要は、以下の通りである。市民講座では第Ⅱ部を含めて全体を構成している。

| |
|---|
| **《そうだったのか「倭の五王」第Ⅱ部》**<br>1　好太王と対戦した倭王<br>高句麗の好太王と対戦した倭王はだれだったのか。『梁書』倭伝にもとづき解説する。<br>2　倭国側の記録に見る半島での戦闘<br>好太王碑の戦闘描写は高句麗側の視点で描かれている。一方、神功紀に挿入された『百済記』には、倭国側から見た戦況、倭軍の進撃状況が描かれている。卓淳国から出発した倭軍が百済の官人久氐と協力し、新羅を侵犯する。それら戦闘の経緯を地図上で確認する。<br>3　倭王旨<br>石上神宮の七支刀銘文に「百済王が倭旨のために刀を作り贈った（372年）」とある。この倭王旨は、讃の数代前の倭王と見られる。銘文とは別に、福岡県瀬高町の「こうやの宮」に、七支刀を携えた人形が存在する。ここでは、人形群の中から、倭王旨や百済の官人久氐の人物特定を試みる。<br>4　倭王年<br>隅田八幡神社（和歌山県）所蔵の人物画像鏡に「百済の武寧王が日十大王（ひとだいおう）年と弟王に、人物画像鏡を贈る（503年）」とある。「倭王年」は武を継いだ筑紫の王と見られる。倭王年が居したとされる「意柴沙加宮」の二つの候補地を見ていく。 |

5　『後漢書』 倭王の居する国

『後漢書』倭伝で、范曄は「国、皆王を称し、世世統を伝う、其の大倭王は邪馬臺国に居る」と、倭王を“大倭王－配下の諸王”の形で描く。古田は、これを通説とは異なり、後漢代ではなく、南朝劉宋代（『後漢書』の著者、范曄の時代）の倭国図と見なす。とすると、この大倭王は范曄の時代に朝献した「倭の五王」であり、５世紀に倭王が居す国が邪馬臺国に相当する（「倭の五王」への直接の言及はない）。

6　『隋書』の倭の五王

古田は『隋書』俀国伝に、「俀国」は大筋次のように記されているという。

①３世紀の魏朝に朝献した倭国と、この俀国とは同一王朝だ。

②倭の五王もこの俀国と同一王朝だ（「魏より斉・梁に至り、代々中国と相通ず」とある）。

③志賀島の金印の故事（１世紀の史実）の国が、今は俀国であり、その風土に阿蘇山がある。

以上、『隋書』が語る“「倭の五王」の王朝”の連続性について解説する。

7　倭王の墳墓

朝鮮半島に出兵した倭の五王は、近畿を中心とする巨大古墳の被葬者だ。それほどの権力者でなければ長期の出兵はできない、従来そのようにいわれてきた。それに対して古田はいう（以下要約）。「朝鮮半島での激戦、それは楽浪郡・帯方郡を中にして、際限もない長期の戦、消耗戦だった。倭王も高句麗王や百済王と同じ東夷の王だ。ならば、倭王の古墳は、高句麗・百済・新羅の王陵や古墳、その規模に類似する九州の古墳の中に見い出すべきではないか。だとすれば、近畿の巨大古墳が成立しえた歴史的背景は何か。それは朝鮮半島へ出兵したからではない。出兵しなかったからである」と。本節ではこの見解にそって、朝鮮半島側の王陵や古墳、倭国側の古墳を見ていく。

8　その他

「磐井の乱」「倭王の都城の候補地」について簡単に触れる。

**《制作を終えて》**

作製の過程では、できるだけ自分の意見を交えず、著作に従って忠実に再現するように努めた。それでも、ときに不明な点があり、自己の判断で構成した部分がある。もしも誤りがあれば、すべて製作者の責任である。映像は直観に訴える力があっても、論理的説得力は弱い。本映像の視聴をきっかけに、多くの方が古田の本を手に取ってくれればよいと願っている。

# 『宋書』倭の五王史料（『日本列島の大王たち』古田武彦著より）

| | 倭国伝 | 帝　紀 | 倭王 |
|---|---|---|---|
| 421 | 詔して曰く「倭讃、萬里貢を修む。遠誠宜しくあらわすべく除授を賜う可し」と | | 讃 |
| 425 | 讃、又司馬曹達を遣わして表を奉り、方物を献ず。<br>讃死して弟珍立つ。使を遣わして貢献し、自ら使持節・都督、倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事・安東大将軍・倭国王と称し、表して除正せられんことを求む。詔して安東将軍・倭国王に除す。珍、又倭隋等 13 人を平西・征虜・冠軍・輔国将軍の号に除正せんことを求む。詔して並びにゆるす。 | | 讃<br>珍 |
| 430 | | （正月）是の月、倭国王、使を遣わして方物を献ず。 | 珍 |
| 438 | | （４月）倭国王珍を以て安東将軍と為す。 | 珍 |
| 438 | | 是の歳、・・・倭国・・・並びに使を遣わして方物を献ず | 珍 |
| 443 | 倭国王済、使を遣わして奉献す。復た以て安東将軍、倭国王と為す。 | 是の歳、・・・倭国、並びに使を遣わして方物を献ず。 | 済 |
| 451 | 使持節・都督、倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓・六国諸軍事を加え、安東将軍はもとの如く、並びに、上る所の 23 人を軍部に除す。 | （７月）安東将軍倭王倭済、安東大将軍に進号す。 | 済 |
| 460 | | （12 月）倭国、使を遣わして方物を献ず。 | 済 |
| 462 | 済死す。世子興、使を遣わして貢献す。<br>世祖の大明６年、詔して曰く「倭王世子興、奕世（えきせ）すなわち忠、藩を外海になし、化をうけ境をやすんじ、恭しく貢職を修め、新たに邊業を嗣ぐ。宜しく爵号を授くべく、安東将軍・倭国王とす可し」と。 | （３月）倭国王の世子、興を以て安東将軍と為す。 | 興 |
| 477 | | （11 月）倭国使を遣わして方物を献ず。 | 興 |
| 478 | 興死して弟武立ち、自ら使持節・都督、倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓・七国諸軍事、安東大将軍・倭国王と称す。<br>順帝の昇明２年、使を遣わして表を上る。曰く「封国は・・（中略）・・以て忠節を勧む」と。詔して、武を使持節・都督、倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓・六国諸軍事、安東大将軍・倭国王に除す。 | （５月）倭国王武、使を遣わして方物を献ず。武を以て安東大将軍と為す。 | 武 |